

薔薇の使節団

1

痛いほどに寒い冬の朝、仮面の盗賊団の戦いに勝利した勇者の少年少女たちは、ロキと共に森を飛び立っていきました。ロキを故郷のコネルアへ送るためです。二匹の風の犬が、彼らを背に青空を遠ざかつていきます。

フルートたちは全員、今にも泣き出しそうな顔をしていました。彼らはこれからつらい別れをしなくてはならないのです。見送っていたオリバンは思わずため息をつく、後ろに控える占者を振り向きました。

「あいつらはどうなる？ また元気を失ってしまうのだろうか？」

ユギルはいつの間にか黒い占盤を地面に置いてその前に座り込んでいました。磨き上げられた石の表面は鏡のようです。青と金の色違いの腫でじつとそこをのぞき込みながら、銀髪のは占者は言いました。

「別れは定められております。ですが 勇者殿たちは希望を失いません。ここに笑顔で戻ってこられる、と占盤が告げております」

「そうか」

オリバンはほっとしました。彼らに何が起きるのか、そこまではユギルの占いでも今は読めません。けれども、決して悪い結果にはならないのだと、ロムドの皇太子は確信したのでした。

北の森の中では、ロムド軍が続々と退却を続けていました。整然と隊列を組みながら、王都ディーラに向かって出発しますが、なにしろ千名を超す大部隊なので、移動にも時間がかかります。いつも最後に戦地を離れるワルラ将軍が、退却する部下たちを副官のガストと共に見守っています。

それを一緒に見ていたオリバンが、ふと思いついた顔になりました。「そう言えば、私はザカラスのアイル王の戴冠式に出席するはずだった。フルートたちと共に、盗賊退治に来てしまったが……。あの件はどうなっただろうか？」

隣国ザカラスは、薔薇色の姫君の戦いの終わりに王を失い、一人息子のアイル皇太子が新しい王に即位しました。その戴冠式が二月の初めに執り行われるので、ロムドからはオリバンが参列することになっていたのです。

戴冠式の後にはロムドとザカラスの間で正式に和平条約を結び運びにもなっていました。金の石の勇者やオリバンたちの働きで、デビルドラゴンの魔手から救われたザカラスです。これまでのような形ばかりの講和ではなく、本当に国と国とが協力し合える、本物の同盟国になるはずでした。そのため条約に調印するという大事な使命も、オリバンは担っていたのです。

すると、占盤をのぞき続けていたユギルが、おや、という表情になりました。興味深そうに占盤を見つめて言います。

「戴冠式には、王妃様と王女様が出席なさるようです。象徴がザカラスへ向かっています」

「義母上とメーレンが？」

とオリバンは驚きましたが、考えてみればそれは筋の通った人選でした。義母のメノア王妃はザカラスの王女で、アイル王の妹に当たります。一方、メーレンはつい先日までザカラス城に滞在して、とても楽しく過ごしてきたのです。 実際には、今は亡きザカラス

前王から人質にされていたのですが、メーレン自身はそんなことには少しも気づいていません。ザカラスに少なくない縁がある二人ならば、オリバンの代理で戴冠式に出席するのにもふさわしいと言えます。

けれども、オリバンは難しい顔をしました。

「大丈夫だろうか……？ ロムドとザカラスが和平を結ぶことを快く思わない者たちは少なからずいる。たとえ戴冠式だけであっても、義母上やメーレンがザカラスへ行くのは危険ではないのか？ 式までにはまだ十日ほど間がある。今から急いで追えば、私が出席することが可能だと思いが」

すぐにでもザカラスへ向かおうとするオリバンに、ユギルは静かに答えました。その目は占盤を見つめたままです。

「いいえ、殿下……その必要はございません。王妃様方はきつとつまくなさるだろうと占盤が言っております。それに、お二人にはトウガリ殿も同行しておられます。危険なことはございませんまい」

「そうか」

オリバンはうなずきました。ひよろひよろと痩せた長身に赤と黄色の奇抜な服を着て、派手な化粧をしたトウガリを思い出します。表向きは王妃付きの宮廷道化というのが職業ですが、その本当の姿はロムドや王妃たちを敵から守る間者です。先の薔薇色の姫君の戦いの際には、フルートたちと一緒にザカラスまで王女の救出に向かい、非常に大きな役割を果たしてきました。間者としても一流ならば、王妃たちを守る心も誰にも負けません。そのトウガリが王妃やメーレンと一緒に緒であれば、心配はないように思えました。

「ザカラス国民にとつても、私のようなむさ苦しい男より、麗しい女性たちが来る方が嬉しいだろう。義母上やメーレンの方が、私よりうまくやるのかもしれない」

とオリバンは太い腕を組んで笑いました。ロムドの皇太子は見上げ

るような立派な体格をした美丈夫です。むさくるしいなどは絶対に誰も思わないのですが、オリバン自身は本当にそんなふうと考えていました。

ユギルは何も言わずに、ただほえみしました。占盤の上を王妃や王女たちの象徴が西へ進んでいくのを見守り続けます。バラの花を何より愛する母娘です。その象徴も大小のピンクのバラの花になって表れていました。

ザカラス城は、闇の竜に蹂躪された傷跡が生々しく残り、新しい王を迎えたというのに、深い悲しみと失望に包まれていました。二輪のバラの花は、そこへ向かっていきます。柔らかく美しい色合いの花が周囲の空気まで優しい色に染めていくようです。

「さしずめ薔薇の使節団というところでございますね」

とユギルは言い、案外、殿下がおっしゃるとおりのことが起きるのかもしれない。と心でそつと考えました。

メノア王妃とメーレン王女の一行がザカラスの首都ザカリアに到着したのは、一月も末のことでした。

半月近くも馬車に揺られる長旅でしたが、その疲れも見せずに、メノア王妃はアイル王へにこやかにほほえみかけました。

「ご即位、おめでとうございます、兄上。新しいザカラスの幕開けを心よりお祝い申し上げます、と陛下もおっしゃっておいででしたわ」とロムド王からの伝言を伝えます。

そこはザカラス城の謁見の間でした。首都ザカリアの北の、切り立った山の中腹に建っている城で、赤い石で造られているために暁城

とも呼ばれます。先の薔薇色の姫君の戦いでは闇と光の戦いの場となり、魔法の力で崩壊寸前の状態になりました。

その場面に居合わせていた道化のトウガリが、アイル王の前で大げさにお辞儀をして見せてから、口上を始めました。

「これはこれは賢くもお優しいアイル王、ザカラスの新王誕生を不承このトウガリめも心よりお祝い申し上げさせていただきます。先のザカラス王であるギゾン王も名君ではありましたが、アイル王の治世にあられては、ますます国は栄え平和な時代が訪れるものと確信してございます。そして、トウガリめは正直驚いております。先だって私めがここを離れた際には、ザカラス城は天井や壁が崩れ、美しい彫刻や柱は倒れ、見るも無惨な姿を不思議な植物の蔓つたに支えられて、かろうじて完全崩落をまぬがれておりました。あれからただか一ヶ月あまりでございます。城を直すにしてもあまりにも時間は少ないことと思われるのですが、こうして来てみれば、ザカラス城は元の通り、麗しの暁城として堂々とそびえております。どのようにして王はこれほど短期間に、完璧に城を元通りにされたのでしょうか？」

道化は驚くほどたくさんのことを、一気に話してしまいました。非常な早口なのですが、流れるような話し方で、不思議なくらいはつきりと言っていることを聞き取ることができません。

ザカラスの新王のアイルは、青年と呼ぶには少しとうが立った人物で、痩せた体に立派な王の服を着込んで、緊張した面持ちをしていました。トウガリの質問に、にこりとませずに答えます。

「ま、魔法使いの仕事だ……。わ、我がザカラスは多くの魔法使いや、ま、魔法の民を抱えているからな。直接雇っていないくても、王室に恩恵を持つものも、お、大勢いる。そ、その者たちを総動員して、城を復旧したのだ」

なあるほど、とトウガリは心の中でうなずきました。アイル王は、

王の最初の仕事として、まずザカラス城再建に取りかかったのです。

ザカラス城は中央大陸でも三本の指に入る大きな城で、それを修復するのは、いくら魔法を使っても、決して簡単なことではありません。

けれども、城は、国のシンボルとして国の内外に示されるもので、国民にとつては心の拠り所になる大切な存在です。それが今にも崩れそうな無惨な姿でいては、ザカラス国の脆弱を外国に示すことになるし、国民にも非常に大きな衝撃と不安を与えてしまいます。ザカラス城を一刻も早く再建することは大切なことでした。

一方、歴代のザカラス王は、代々魔法の民とつながりを持っていて、もっぱら自分や国に敵対する邪魔者を消すために、ひそかに利用してきました。言ってみれば、王室のとおっておきの「切り札」です。アイル王は、この切り札を惜しげもなく使って、驚くほど短期間に城を復元したのです。

アイル王は、決して無能ではありません。むしろ逆で、実際には非常に頭の良い、思慮深い人物です。ただ、幼い頃から父である先のザカラス王にずっと抑圧されてきたために、すっかり自信を失って、力を発揮できずにいたのです。周囲の者たちも、彼のそんな優れた部分には少しも気づいていません。それほどに、先のザカラス王は圧倒的な威光を周囲に放っていたのです。

さてさて、この新しい王は今度こそ自分らしい生き方ができるようになるのだろうか、とトウガリは考えました。お辞儀をした姿勢から見上げるアイル王は、相変わらずとても神経質そうで、おどおどした様子をしています。もとから話すことはあまり得意ではないのですが、緊張することばにつまずいてしまつて、それが相手にいつそう頼りない印象を与えてしまいます。そして、何より、ひどく暗い目をしていました。トウガリがザカラスを離れたときよりも、ずっと沈んだ顔つきです。何かを思い悩んでいるような、深い何かをじつとのぞき込

んでいるような、そんな印象を受けます。

ザカラスに誕生した新しい王がこの様子では、家臣たちの気持ちも盛り上がるはずがありませんでした。城は完璧に再建され、戴冠式も明後日に迫っているというのに、ザカラス城にはまるで葬式でも執り行われるような沈んだ雰囲気漂っていました。城全体が、死んだ先のザカラス王の喪に服しているようです。

けれども、そんな暗い雰囲気の中で、メノア王妃だけは輝くような笑顔で兄のイル王にほほえみかけていました。見るものに、不安や心配事を思わず忘れさせてしまうような、優しく美しい笑顔です。

「ザカラス城が闇に心奪われた魔道師によって壊されてしまったと聞いて、私はそれは心痛めておりました。私が生まれ育った懐かしいお城です。それがどんなふうになってしまったのだろうと、道中ずっと心配していたのに、ザカリアに到着してみれば、城はこうして元通り、輝く姿でそびえていました。それがどれほど嬉しいことだったか、ご想像になれますか、兄上？ 私は本当に、もう少しで嬉し泣きするところでしたわ。もちろん、父上が突然亡くなられてしまったことは、とても悲しゅうございます。でも、ザカラスが変わらずこうして美しく立派な様子でいるのを見られて、私は本当に幸せに思っております。これはすべて兄上のお力ですわ。兄上は昔から、本当に賢くて立派なお方でしたもの。きつと、父上の後を継いで、これからもザカラスを守り続けてくださいますわね」

おや とトウガリは思わず自分の主人を盗み見ました。

ザカラスにいた時代には、天使の笑顔の姫と呼ばれ、国民から愛されてきた王妃です。決して人を悪く言わない、心優しい人物ですが、意外なほどの確に自分の兄の長所を見抜いていたのです。おそらくは、意図的にしていることではないでしょう。メノア王妃は相手の良いところを本能的に見抜いて、それに向かってほほえむことができる女

性なのです。

そう、トウガリに対してもそうでした。奇抜な服装と化粧をして、軽薄にも聞こえる口上をまくし立てる道化だったのに、まだ王女だったメノアはトウガリの忠誠を即座に受け入れてくれました。そして、言ったのです。

「トウガリ。トウガリは私と一緒にロムドへ行ってくれますよね？ ずっと、私と一緒にいてくれますね？」

その時、メノアが見せてくれたほほえみは、今も大切にトウガリの胸にしまっており、死ぬまで誰にも渡さず、死んでも手放さず、あの世まで持つていくための宝物です……。

けれども、イル王は、妹の素直な賞賛にもあいまいな笑顔を返しただけでした。いかにも自信のなさそうな表情が浮かんでいます。妹がお世辞など言っていないことはわかっているのですが、どうしても自分をそんな優れたものとは思えないのです。あわてたように、話題を変えます。

「お、おまえの育った城だ、メノア。た、戴冠式が終わった後まで、ゆ、ゆつくりしていくといい……。そ、そ、そう言えば、メ、メーレーン王女も一緒に来るとい話ではなかったか？ お、王女はどうされたのだ？」

謁見の間に来ているのはメノアと道化のトウガリ、そしてロムド城からついてきた数名の家臣だけで、メーレーン王女の小柄な姿はどこにもなかったのです。

とたんに、メノア王妃は困り顔になりました。

「お城までは来ておりますの。でも、馬車から降りたとたん、ザカラス城で仲よくしていた犬が駆け寄ってきたのに喜んで、そのまま中庭に散歩に行ってしまったのですわ。ずっとそこで遊んできたから、勝手はよくわかっていて、と言って……。なんと言ったらよしいんで

しよう。最近のあの子はますます……その……活発になってしまったというか、母の言うことをますます聞かなくなってしまつて……」

手袋をはめた手を頬に当てて思い悩むメノア王妃は、天使から母親の表情が変わつていきます。そんな主人に、トウガリは優しく話しかけました。

「ご心配めされますな、メノア様。子どもというのはいつの時代にもそのようなものでございます。小さい頃こそ親の言いつけに素直でいても、次第次第に自分のやりたいことが出てきて、親の言うことに逆らつて、自分の意志を貫こうとし始めるものです。それは決して反抗ではなく、大人になつてきたという証拠、親から独り立ちしていくめでたいしるしでございます。親から独立してこそ一人前です。メーレーン様は立派な大人になりつつございますよ」

そう言われても王妃は心配顔のままでしたが、アイル王が意外なほど真面目な顔で答えました。

「そ、その通りだ。だが、わ、私にはその経験がないのだ……。わ、私は今でも、ち、父上から独立できずにいるのだらう……」

トウガリは思わずアイル王を見ました。王は相変わらず深く思い悩む顔をしていて、控える家臣たちが困つたような表情をしていることにも、まったく気づかずにいます。家臣たちは、本当に頼りない王だ、これでザカラスは大丈夫なのだらうか、と考えているのです。

さてさて、とトウガリはまた心でつぶやきました。

アイル王が死んだ先王にまったく逆らつたことがないかと言えば、決してそうではないはずなのですが、王はその事実を思い出せずにいるようでした。

2

一人の子どもがザカラス城の中庭を歩いていました。

黒髪に薄水色の目をした、十一、二歳くらいの少年です。その顔立ちを整っているのですが、いやに冷ややかな、大人のようなまなざしをしていました。世の中のいつさいに心動かされることのない、冷淡な印象を与える目です。表情も、妙に大人びていて、あまりかわいげがありません。年齢こそまったく違いますが、先日他界した先のザカラス王にそっくりです。

少年の名前はトーマ・セイ・ザカラス。アイル王の長男です。父よりも祖父の前ザカラス王によく似た面立ちの、ザカラスの皇太子でした。

トーマ王子は中庭に一人きりでいました。庭には雪が降り積もり、園丁が散策路にそつて綺麗な白い道を作っていました。その中を何かを思う顔で黙つて歩いていきます。時折冷たい風が庭の中を吹き抜けますが、マントを激しくあおられても、気にとめる様子もありません。庭は静まりかえっています。鳥の声さえ聞こえない静寂の中、雪の道だけが延々と続いています。この白い世界に生きているのは、王子一人だけのようにさえ感じられます……。

ところが、突然その静けさを破つたものがありました。大きな犬の鳴き声です。ワンワンワン……と激しくほえたてています。

トーマ王子は驚きました。信じられないように声が聞こえた方を振り向きまします。犬の声は、なんと、自分の頭のすぐ上から聞こえてきたのです。

そこには、太い木の枝が大きく張り出していました。歩道のかたわらに生えた木から伸びているものです。葉の落ちた枝には、雪が真っ白に積もっています。

そこになぜだかピンク色も見えました。枝が大きく揺れ、積もった雪が頭の上に降りかかってきます。木の上に何かがいるのです。

すると、犬の声と一緒に、今度は人の声も聞こえてきました。あわてたように、こう叫んでいます。

「いけません！ だめですわ、そんなに暴れちゃ！」

少女の声です。王子はますます驚きました。目をぱちくりさせながら木の上を見つめ続けます。声はますますあわてています。

「いけませんったら！ そっちに行ったら落ちてしまっ！」

きやああつ、と突然悲鳴が響き渡りました。木の上からピンク色が降ってきます。トーマ王子の真上です。

それが人間なのだとわかったとたん、王子はとっさに両腕を広げました。落ちてくるピンク色のものを抱きとめ、止めきれなくて、そのままひっくり返りました。雪をかいて作った道に仰向けに倒れ、後頭部と背中を思いきり打ち付けてしまいました。その上に、ずっしりと重たいものがのしかかってきます。ピンク色のドレスを着た少女でした。

少女は、きょとんと王子の上に座り込んでいました。小柄で華奢な少女です。体重も、トーマ王子よりずっと軽かったのですが、それでもまともに下敷きにされると苦しくて、王子はうめきました。頭と背中也痛みます。とたんに、少女はびっくりしたように飛び上がり、王子の上から飛びのきました。

「ご、ごめんなさい！ つぶしてしまいましたわ！ お怪我はありません！？」

と王子をのぞき込んできます。銀に近いプラチナブロンドの巻き毛に、大きな灰色の瞳の、とてもかわいらしい少女です。

「平気だ」

とトーマ王子は起き上がりました。実際には、打ち付けた頭も背中

もずきずきしていましたが、それは顔に出さずに立ち上がり、服から雪を払い落とします。

少女は雪の上に座り込んでいました。ピンク色のドレスがその回りに広がって、まるでバラの花が咲いているようです。腕の中には白と黒のぶちの子犬をしつかり抱きしめていました。自分と同年くらいだろうかと、トーマ王子は考えました。頼りなさそうな、妙に危なっかしい雰囲気があります……。

少女が王子を見上げながら言いました。

「ありがとうございます。助かりましたわ。この子が木に登って下りられなくなっていたものだから、助けに行って、滑り落ちてしまいましたの。あなたが受け止めてくださらなかったら、メーレーンもこの子も怪我をしてしまうところでした」

トーマ王子は目をまん丸にしました。そうすると、いやに大人びた顔が急に年相応な表情になります。王子は、同時にいくつものことに驚いてしまったのです。とっさにどれから口にしていいのかわからなくなつて、ぼかんと少女を見つめてしまいます。

「木に登った 犬が？」

王子が真っ先に言ったのはそれでした。

「で、君も木に登ったわけ？ そのドレスで？」

ええ、と少女は答えて、にっこり笑いました。無邪気なほど屈託のない笑顔が広がります。

「メーレーンも驚いてしまいましたわ。犬が木に登るなんて話、今まで聞いたことありませんでしたもの。でも、本当にルーピーはこの木に登りましたのよ。あ、ルーピーってこの子の名前ですわ。一緒に中庭に遊びに来たら、急に木に駆け上がってしまったって、助けに来てくれてメーレーンを呼びましたの」

メーレーンというのがこの少女自身の名前なのだと王子は気がつきました。ということは……

「君はメーレーン王女か！ ロムド国の！」

とさらに驚きながら言います。そういえば、父の戴冠式に参列するために、ロムド王妃である叔母と一緒に城に来ると聞かされてしまった。

「確か、メーレーン王女はぼくより二つ年上だったはずだ！ じゃ、君の歳は」

「ええ、十三歳ですわ。なつたばかりですけど。でも、どうしてそんなにメーレーンのことをよくご存じですか？ メーレーンは、あなたに初めてお会いしますのに」

「トーマ王子は開いた口がふさがりませんでした。どう見ても自分より幼く見えるこの少女が年上で いや、そんなことは大した問題ではありません。それより重要なことは、これでした。」

「ぼくはザカラスの皇太子のトーマ・セイだ。ぼくの父上はこの間ザカラス王になったアイル・ロダ。ぼくは君のいとこだよ、メーレーン姫！」

「まあ！」

とメーレーン王女は頬に両手を押し当てて驚きました。灰色の大きな腫がいっそう大きくなっています。そうしていると、かわいらしい顔がますますかわいらしく見えます。

「いとこ……？ それじゃ、あなたがトーマ王子でしたの？ まあ……」

そう言ったとき、王女はつくづくと少年を見つめました。トーマ王子は思わず顔を赤らめました。転んだときに服装が乱れて

しまったことが急に気になって、しわだらけになった上着をひっぱって伸ばし、襟元を正しますが、ふと気がついてメーレーン王女に手を差し伸べました。王女はまだ子犬を抱いたまま雪の上に座り込んでいたのです。

「立つて、メーレーン姫。そんなところに座っていたら冷えてしまうよ」

王女は素直にその手を取って立ち上がりました。驚くほど軽い手応えが王子に伝わってきます。華奢なその姿は、立つといっそうはつきりしました。本当に、トーマ王子よりも背が低くて小柄な少女です。とても自分より年上には見えません。

王女がまだ驚いた顔をしているので、王子は咳払いをしてから言いました。

「驚くのは無理もないよね。ぼくたちは初めて顔を合わせたんだから。メーレーン姫が先月この城に滞在していたとき、ぼくは南のサータマン国を訪問中だったんだ。今月になってから城に戻ってきたんだよ」

それがサータマンの王女を将来後に迎えるための見合いだったことは、なぜか言いたくなくて、王子はことばをにこしました。

どのみち、その縁談を積極的に進めていたのは、ザカラスとサータマンの国同士の結びつきを強めようとした祖父だったので。その祖父が急逝して、サータマンの王女との縁談は宙に浮いて流れようとしています。正直、トーマ王子はとてもほっとしていました。見合いの席で会ったサータマンの王女は、とても太っていて醜かった上に、王子より二十歳近くも年上だったからです。

愛らしい顔立ちにプラチナブロンドの巻き毛の少女は、トーマ王子のすぐ前に立っていました。本当にまじまじと王子の顔を見つめてきます。あまり真剣に見つめられるので、王子はまた顔を赤らめ、なに？

と尋ねました。

すると、少女が口を開きました。

「メーレーンは、とてもびっくりしているのですわ……。メーレーンがザカラス城にいる間、トーマ王子の話はいろいろな方から聞かされたのですけれど、皆様、王子はとても冷たくて怖い人だとおっしゃっていたんですもの。怒って、家来をすぐ牢屋に入れてしまうような、意地悪な王子なんだ、って」

トーマ王子は本当に真っ赤になりました。思わず声を荒げてしまいます。

「だ　誰がそんなことを　!!!」

そんな無礼なことを言った奴はすぐに牢屋へ送り込んでやる！と口走ろうとすると、メーレーン王女が目の前でふいにほほえみました。花のように柔らかな笑顔が、にっこりと広がります。面食らってことばが出なくなつた王子へ、こう続けます。

「ええ、それは間違いだつたと、メーレーンは、はっきり知りました。人の噂は当てにならないものだつてトウガリはよく話してくれるのですけれど、本当ですわね。だって、トーマ王子はこんなに優しく立て派な方だつたんですもの。メーレーンは、とつても幸せですわ。お会いできて本当に嬉しいです」

輝くような王女の笑顔は、疑うこともなく王子を見つめ続けています。尊敬と優しさが暖かなまなざしになって伝わってきます。トーマ王子は、ますますなにも言えなくなりました。本当は皆が言っているとおりの意地悪な王子なんだよ、と心の中でつぶやいている自分がいましたが、それをことばにすることはできませんでした。

すると、そこへ、王女を呼ぶ声が聞こえてきました。

「メーレーン様……！　どちらにおいでですか？」

中年の男の声です。王女はすぐに嬉しそつに返事をしました。

「はあい、ここにおりますわ、トウガリ！」

やってきたのは赤と黄色の服を着て、青い鈴付き帽子をかぶつた道化でした。一目見たら忘れられない派手な化粧をしています。少女のそばにいる少年を見ると、すぐに長身を折り曲げて、大げさなほどうやうやしくお辞儀をします。

「これはこれは、ザカラスの皇太子のトーマ殿下。このトウガリめことは覚えておいででしょうか。里帰りをなさつたメノア様に同行して、トウガリがこの城にまいりましたのは、今から四年ほど前のことになりました。大きく立派になりましたな、トーマ殿下。祖父君のギゾン王にますます似てこられて」

とたんに、トーマ王子は不機嫌な表情になりました。ぷい、と顔をそむけてしまいます。祖父に似ている、と言われるのは嫌だつたのです。誰も彼もがそう言うので、ますます不愉快は募ります。そう、父であるアイル王でさえ……。

年に似合わないもの思う顔になつてしまった王子を、トウガリはお辞儀の恰好で眺めました。王子は悩んでいるのです。顔立ちはまったく違つのに、その姿はなぜか、悩むアイル王の姿と重なって見えます。トウガリはおもむろに王女の方を振り向きましました。なにも気がつかずにいる無邪気な少女に尋ねます。

「メーレーン様はトーマ殿下に初めてお会いでしたか？　姫様とは一番年の近いとこであられる方ですが」

「ええ。今それをうかがつていたところですね。トーマ王子は、メーレーンとこのルービーが木から落ちたところを助けてくださったんですよ」

「木から落ちた？」

さすがのトウガリもこれには目を丸くしました。フルートたち金の石の勇者の一行と旅をしてから、この王女は本当に活発になっていました。それまでは自分の部屋と母親の部屋だけを行き来して満足して

いるような、それはおとなしい少女だったのです。勇者たちの影響で木登りまでしたのか、と思わず心で苦笑してしまいます。

ところが、次の瞬間、トウガリはあるものに気がつきました。道のかたわらの木に近づいて、雪の積もった地面を眺めます。

「ええ、その木ですわ。ルーピーが突然登りだしたから、メーレーンは本当にびつくりしました」

と王女が無邪気に言い続けます。

トウガリは少年と少女を振り返ると、また丁寧にお辞儀をして言いました。

「冬將軍が送りつけてくる風がとても冷とつございます。お風邪を召しては大変です。姫様も殿下も、お城の中へお入りください。メノア王妃様も姫様をお捜しですよ」

はい、とメーレーン王女は返事をして、言われるまま城に向かって歩き出しました。腕の中には子犬を抱いたままです。その後を仏頂面のトーマ王子がついていきます。何も話そうとしませんが、メーレーン王女の方では屈託なくあれこれと王子に話しかけます。王子が無愛想な返事をして、まったく気にしません。

その後ろを歩きながら、トウガリは素早く周囲に目を向けました。それは警戒の視線でした。

3

その夜遅く、王妃と王女の前から退出したトウガリは、道化の服を脱いで普段着姿でザカラス城の中を歩いていました。派手な化粧を落とせば、その下のトウガリの素顔は本当に平凡です。痩せた長身は目

立ちますが、服装といい、彼のいる場所といい、非番になった兵士が使用人が歩いているようにしか見えません。

すると、それを追ってくるように後ろから近づいてきた人物がいましました。やはり地味な服で身を包んだ、トウガリと同じくらいの年代の男です。トウガリは鋭くそれを振り向きました。

「ルマニカ」

かつてトウガリがザカラスにいた時分に一緒に間者の修業をした仲間です。仕える先をザカラスからロムドに変えたトウガリを、裏切り者とザカラス兵に引き渡した人物でもあります。

そんなトウガリに、ルマニカはあわてて首を振って見せました。

「おっと、早まるなよ。こっちはもう、お前に手出しするつもりはないんだから。あれは仕事だったんだ、悪く思うな」

トウガリは返事をしませんでした。けれども、それは確かにルマニカの言うとおりなのです。彼ら間者は主人の命令に従って行動する存在です。トウガリを捕まえて地下牢に放り込め、と命じたのは、先のザカラス王であり、魔法使いのジーヤ・ドウでした。その二人はもうこの世にはいないのです。

トウガリは口を開きました。

「ちょうど良かった。調べてもらいたいことがある」

ルマニカは、おや、という表情になりました。

「なんだ、またザカラス間者に返り咲きか？ ハルス・トウガリが戻ってくるんじゃない、俺などお払い箱かもしれないな」

「その名はロムドに行ったときに捨てた。俺はトウガリだ」

とトウガリはぶつきらぼうに答えました。つまらない嫉妬や競争心などと関わっている時間はありません。思わず肩をすくめ返したルマニカに言い続けます。

「メーレーン様が毒虫のワジにもう少しで襲われるところだった。中

庭の雪の上に這った後が残っていた。犬が気がついて、メーレーン様を木の上に誘ったところへ、トーマ殿下が通りかかって、難を逃れたようだ。こんな季節のこんな場所にワジが現れるはずはない。間違いない、メーレーン様の命を狙う奴のしわざだ」

ルマニは本当に驚いた顔になりました。難しい表情で腕組みします。

「それはザカラスの仕業じゃないぞ」

「わかつている。今、メーレーン様を暗殺してザカラスの益になることは何ひとつない。ザカラスとロムドが和平を結ぶことを警戒する、どこかの国の差し金だ。それを調べてほしいんだ。同じ手はもう使ってこないだろうが、またメーレーン様の命が狙われるかもしれない」

「ロムドの王女が暗殺されれば、和平は決裂、下手をすればロムドとザカラスで全面戦争だから……。わかった、調べよう」

とルマニは答え、それから、少し口調を変えました。

「こつちからも伝言だ……。部屋に来るように、と陛下がおっしゃっている」

「アイル王が？」

今度はトウガリが驚く番でした。

「なんのために？ それに、どうやって？ この恰好で王の部屋を訪ねられるはずはないだろう。貴族の恰好に変装したって無理だぞ」

「俺は知らん。ただ、お前ならできるはずだ、と陛下はおっしゃっていた」

言いながら、ルマニの目が真剣そのものになりました。確かめるように、疑うように、トウガリの顔を見つめます。背が高いトウガリです。ルマニは見上げる形になってしまいます。

「本当に、ザカラスに戻ってくるつもりはないんだな？ 陛下からお呼びがかかっているなら、そつとはつきり言ってくれ、トウーガリン」

トウガリは、やれやれ、と心の中で肩をすくめました。ルマニは、かつてのライバルが古巣に戻ってきて、自分の地位を脅かすのではな

いかと心配しているのです。

「トウーガリンなんて奴は知らん。俺の名前はトウガリだ」とトウガリは、そつげなく答えました。

ルマニと別れた後、トウガリは、秘密の通路を通過して、ザカラス城の中央にあるアイル王の部屋を訪ねました。

ザカラス城は古い城なので、長いその歴史の中で、城が敵に包囲され、攻撃を受けたことがたびたびあります。そういう事態に王が脱出できるよう、城には通路が張り巡らされ、魔法や仕掛けで隠されているのです。通路の場所は代々の王とごく一部の者にしか伝えられませんが、薔薇色の姫君の戦いの際に、トウガリはその通り方を知ることができたのです。

もう真夜中の時間でしたが、アイル王は服を着たままで部屋の中をうろろろしていました。トウガリが来るのを待っていたのです。その前にひざまずいて、トウガリは頭を下げました。

「何かご用でしょうか、陛下」

トウガリはもうロムドの家臣として正式に認められています。以前のように、ザカラスに仕えているふりをする必要もなかったのですが、一応、王には敬意を払って見せます。アイル王は、トウガリならば秘密の通路を知っているはずだと推理して呼びつけました。そんなふうには見えなくても、確かに非常に頭の切れる人物なのです。

アイル王はトウガリの前で落ちつきなく、そわそわと体を動かし続けていました。意味もなく両手を握ったり開いたりしている様子は、いかにも神経質そうで不安げです。いつも以上につまづきながらこん

なことを言います。

「よ、用があつたわけではないのだ、ト、トウガリン……。そ、そなたは、こ、この城で本当は何があつたか、い、一部始終をよく知っている。わ、私には、ひ、人に話せないことが、あ、あまりにも多すぎる。だ、だから、わ、私の話し相手に、な、なつてもらいたかつたのだ……」

トウガリは何も言わずに王を見つめ続けました。本来、トウガリは非常に無口な男です。仕事柄、道化の時にはよくしゃべりますが、素の時には相づちもろくに打たない無愛想ぶりです。その自分を話し相手にしようとするのは人選の誤りというものでしたが、トウガリはそうは言いませんでした。王が、単純に自分の話を聞く相手を求めているのだとわかつたからです。事実、アイル王はトウガリが返事もなしにうちに話し出していました。

「わ、私は怖いのだ」

とアイル王は言いました。

「ち、父上が死んで、私がザカラス王になつたが、こ、国民は皆、私は王にはふ、ふさわしくないと思っている……。し、城の家臣たちはなおさらそうだ。い、今でも彼らは父上の命令を待ち続けている。こ、この国に、今、王はい、いない。わ、私は名ばかりのザカラス王なのだ……」

王の瞳は先のザカラス王とは色が違いました。黒に近い藍色で、それが深い苦悩に彩られていつそう暗く見えています。立派な王の服も貧弱な体は隠しきれません。いかにも頼りなさそうな王が、こんなふうに悩んでいれば、誰も信頼などしないのは当然のことでした。

王の声はますます暗くなつていきます。

「こ、この城にはまだ、先のザカラス王がいる……。ち、父上は死んで、確かに王家の墓地に埋葬されたが、み、見えない姿で今もまだ、

ザ、ザカラスを支配しているのだ。そ、そして、わ、私の無能ぶりを、い、今もあざ笑つておられる」

トウガリは思わず口を尖らせました。しばらく考え込んでから、こう言います。

「ギゾン王が生きているのは、陛下の心の中だけでございましょう。先王は確かに死にましたぞ。己にふさわしい収穫を刈り取つて」

「わかつている！ わかつている！」

アイル王は神経質に叫びました。むやみと頭を振り回します。

「わ、私は父上の影に捕らえられているだけだ！ し、死んだ父上には、も、もう何もできない！ だが……この国には、父上にう、瓜二つの王子がいるのだ！」

トウガリは、はつとしました。日中、城の中庭で出会つたトーマ王子を思い出します。薄水色の目をした王子は、確かに、死んだ先王によく似ていました。

アイル王は興奮して言い続けていました。

「あ、あれがそばにいと、わ、私は父上がいるような気がするのだ……。あれが私を見ると、ち、父上が私を見ているように思えてならない！ あれも、私を馬鹿にしている。た、頼りのない王だ、父親だ……。と、か、家臣の中にも、あれのほうに王にふさわしい人材だと思つ者は多い。い、いつか、あれは私を王座から引きずり下ろすだろう……。わ、私が父上にそうしたように、わ、私に刃を向けて、私を殺すのだ……。！」

アイル王は甲高く笑い出しました。病的な響きの笑い声です。けれども、それを聞きつけて心配して飛んでくる家臣はありませんでした。神経質な王が時々こんな発作を起こすことに、皆が慣れつこになつてしまつていたのです。

トウガリは黙つて王を見つめ続けました。

王を脅かしているのは、トーマ王子でも死んだ先王でもありません。アイル王自身の心の中に落ちていく深い影です。

自分自身に追い詰められている王を、トウガリは、痛ましいことだ、と思います。確かに、持って生まれた性分というものもあるのですが、この弱さは、死んだ父親によって作られてしまったところも大きいのです。偉大で独裁的だった父親は、息子から自信をこことく奪い、思いのままに動かそうとしてきました。今、その父親がいなくなり、ようやく自分らしく生きられるようになったというのに、息子はまだ父親の影響を受け続けています。そして、不安のあまり破滅の道へと転落しそうになっているのです。

笑いの発作が治まると、王はどざりとそばの椅子に座り込みました。疲れ切った様子で大きなため息をつきます。

王が何も言おうとしないのを見て、トウガリは静かに口を開きました。

「陛下は確かに父上に刃を向けられた。ですが、父上を殺してはおられませんぞ」

アイル王はまた深いため息をつきました。うつむいたまま答えます。

「そ、そうだ。金の石の勇者が私を止めたから……」

トウガリは、今度は金の鎧兜を身につけた勇者を思い出しました。それこそ、世界を救う英雄にはとても見えない、少女のように優しい顔をした少年です。その彼が、短剣を握るアイルに言ったのです。

「だめです、殿下。自分のお父さんを殺したりしては、いけないんです」と……。

あれはそう深い意味で言ったことばではなかったのだろう、とトウガリは思います。フルートは単純に、自分の親を殺してはいけないのだ、と考えただけです。ただ、それがぎりぎりのところで、今のアイル王を救っているようでした。もしもあそこで本当に父を刺し殺していたなら、アイル王は本気で自分の息子に怯えたことでしょう。自分

がしたのと同じことを、息子からされるのに違いがないと考えて、殺される前に自分から王子を始末しようと考えたかもしれませぬ。

なるほど、それであの悩み顔か、とトウガリはトーマ王子の暗い表情も思い出しました。父親の不安と疑いを、王子は感じ取っているのです。まったく痛ましいことだ、とトウガリはまた考えます。死んだ先の王の呪いが、今もまだ、このザカラスをおおっているようです。

すると、アイル王がぼつりとつぶやくように言いました。

「き、金の石の勇者は旅立つてしまった。わ、私たち親子を止めてくれる者は、いるのだろうか……？」

トウガリには、それに答えることはできません。そして、同時に、メーレン王女暗殺の動きを今の王には相談できない、とも感じました。

王は自分自身の悩みで手一杯になっているのです。やはり、トウガリ自身が王女と王妃の安全のために動くしかないようでした。

4

「お母様」

灯りを落とした部屋の中に、メーレン王女が、そっと入ってきて言いました。そこはザカラス城の客室です。隣の部屋で休んでいるはずの王女が、母の寝室に忍び込んできたのです。

メノア王妃はまだ眠っていませんでした。すぐにベッドに起き上がります。

「まあ、どうしたのです、メーレーン？ 眠れないのですか？」

「お母様と少しお話ししたいことがあるのですわ……お母様のお床に入ってもよろしいですか？」

メノア王妃はまたちよつと驚きましたが、娘が考えるような表情をしているのを見て、すぐに手招きしました。

「いらつしやい」

王女は、ぱつと顔を輝かせ、すぐに母のベッドに潜り込んできました。母の枕に顔を埋め、匂いをかいで、うふふ、と笑います。

「お母様のバラの匂い。とつても久しぶりですわ」

「寝る前の湯浴みにしか使わない香水ですからね……。こんなふうにあなたが来るなんて、何年ぶりでしょうね、メーレーン。大きくなつてしまったから、こんなことももうないのだからと思つていたのに」

そう言つて、王妃もベッドに横になりました。枕に頭を載せている娘に自分の頭を並べ、顔を見合わせて、ふふふ、と笑い合います。まるで少女同士のような、いたずらめいた笑いが行き交います。

すると、王女が急に真剣な顔になりました。少しためらつてから、こう切り出します。

「ねえ、お母様……お母様は、お父様以外の殿方を好きになつたことはおありですか？」

メノア王妃はびっくりしました。まさかこんな話をされるとは思わなかつたので、逆に聞き返します。

「どうしてそんなことを聞きたいのですか？」

王女は母の布団の中で、もじもじと毛布をもてあそんでいました。さらにためらいながら、話し出します。

「メーレーンは、金の石の勇者様が好きでした……。勇者様はとても優しいのに、同時にとても勇敢で男らしくて……。勇者様がポポ口をお好きなのがわかつて、メーレーンは勇者様をあきらめたのですが、で

も、心の中では、勇者様がやっぱりとても好きでした。ずっとずっと、死ぬまで勇者様を想い続けよう……勇者様が誰をお好きでも、メーレーンは一生勇者様を愛し続けよう……そんなふうと思つていたので……」

メーレーン王女はまだ十三になったばかりです。その歳で死ぬまで想い続けるとか、一生愛し続けるとか言うのはいかにも早すぎるのですが、本人はいたつて大真面目でした。メノア王妃も、そんな娘を笑つたりはせず、ただ黙つて聞き続けていました。侍女たちは別室に控えているので、今、部屋の中にいるのは母と娘の二人だけです。暖炉の中で燃える火が、時折、ぱちつと小さな音を立てるだけで、他に聞こえてくる音もありません。

母の毛布を口元まで引き上げながら、王女が言いました。

「メーレーンは今日、中庭でトーマ王子にお会いしました……」

幼いほどに無邪気な顔が、真っ赤に染まっています。

「王子は木から落ちたメーレーンと犬のルーピーを助けてくださいましたわ。ご自分はメーレーンの下敷きになってしまつて。でも、全然お怒りにならずに、逆にメーレーンを助け起こしてくださつたんです。とても優しい方です。メーレーンよりお若いのに、とても落ち着いていらして、頼もしくて……。メーレーンは、今でも勇者様のことが大好きなのです！ だけど、……。トーマ王子のことを思い出して、なんだか胸がどきどきしてきちゃうんですわ。どうしてなのでしょう？ こんなに簡単に、別の殿方を好きになるなんてこと、あつてよろしいんでしょうか……？」

王妃は黙つて王女の顔を見つめました。王女は顔を真っ赤にして、今にも泣き出しそうな表情になっています。その顔はやっぱり年齢より幼く見えますが、そんな中にも大人びたものがうつつすらと漂い始めていることに、母親は気がつきました。

王妃はにっこりとほほえみました。天使の笑顔と呼ばれる優しい表情で、王女に向かつてうなずいて見せます。

「母にもありましたよ。あなたのお父様以外にも、心寄せた殿方はいました」

メーレン王女は目をまん丸にしました。自分から聞いたことはいえ、本当にこんな答えを聞けるとは思っていなかったのです。それはどなたですか！。と思わず聞き返してしまいます。

「しーっと王妃はほほえみながら言いました。あまり大きな声を出しては、控える侍女たちに気づかれて、話を聞かれてしまいます。少女のようにいたずらっぽい笑顔で、王妃は答えました。

「いくらあなたでも、その方の名前を教えるわけにはいきませんよ。人の耳に入っては大きなことですからね……。それに、あなたの知らないお方です。まだロムドに嫁ぐ前に出会った殿方ですから」

「ど、どんな方ですか？ どうしてお母様はその方と結婚なさらなかったのですか？」

「急き込むように訪ねる王女に、メノア王妃はまた笑いしました。優しい優しい笑顔で答えます。

「素敵な方でしたよ。私を守ってください。騎士でした。でも、私はもうロムドに嫁ぐことが決まっていたし、その方も、私を王女としてしか見てくださらなかったのです。いつでもそばに控えて、私を誠心誠意守ってくださいましたけれど、本当に献身的に、いつでも大切にしてくださいるけれど、その方に、私は女性としては見ていただけなかったのですわ」

ほほえむ王妃の顔を、ふっと淋しいものがよぎっていきました。それを見たたん、メーレン王女は思わず聞き返してしまいました。

「お母様は今でもその方が好きなのですか？ お父様より？」
我知らず、不安そうな声になってしまっていました。

メノア王妃は、また穏やかな優しい笑顔に戻って答えました。

「心配はいりませんよ、メーレン。あなたのお父様は本当に素晴らしい方です。私になどもつたいないほどのね。私はいつも、心からあなたのお父様をお慕いしています……。ただ、あなたの気持ちもわかる、と言いたかったです」

けれども、そのことはどこかで何かをはぐらかしているようでした。メーレン王女は懸命に母の顔を見つめ、その目の中に真実を見つげようと思いました。

「その方は？ 今はどうしていらっしゃるのですか？」

「結婚なさいましたよ。全然別の素敵な女性とね。私もロムドに嫁いで、それきり、もうお会いすることもなくなりました」

静かに王妃が答えました。さあ、この話はこれでおしまい、もう寝ましょうね、と王女に言います。娘の追及を打ち切ったのです。

かたわらで目を閉じた母の美しい顔を、メーレン王女は見つめ続けました。母が昔好きだったという殿方が、まだすぐそこにいて、今でも母に忠誠を誓って控えているような、不思議な錯覚に襲われます。なぜだが、赤と黄色の派手な衣装が唐突に思い浮かびます……。

すると、王妃がまた目を開けました。自分を見つめていた娘に、優しくまたほほえみかけます。

「メーレン、あなたはまだ十三です。これからいろいろな方々にお会いするでしょう。尊敬できる方にも、心からお慕いできる方にも、きつと巡り会えることでしょう。結婚するとかしないとか、そういうことは関係なく、共に生きたいと思う方と出会って一緒に生きていくことができれば、きつと、それは幸せなことですよわね」

だから、トーマ王子との出会いも大切になさい、と王妃は言いました。

「王子のことを良くないように言う方たちがいることは、私も知って

います。でも、あなたがトーマ王子を良い方だと思つたならば、それを信じて差し上げなさい。きっと、王子は本当に優しい素晴らしい方なのでしょうから」

そんなふう言われて、メーレーン王女はまた真つ赤になりました。優しさの中に強さを感じる母のことばです。はい、と素直にならずき、そのまま布団の中で母にすり寄りました……。

5

「トウガリン」

トウガリンが王妃や客人の前で芸を披露して、控え室にもどつたとたん、突然誰かがそう呼びました。ザカラス城に到着して二日目の午後のことです。トウガリンは驚き、部屋に昨日会つた間者がいるのを見て顔をしかめました。

「ルマニ。この恰好の時にその名前では呼ぶな」

トウガリンは赤と黄色の衣装を着て、顔には派手な道化の化粧をしています。その正体が間者であることは、誰にも秘密になっています。

トウガリンが部屋のドアを閉めて鍵を下ろすのを確かめてから、ルマニは口を開きました。

「見つかったぞ、メーレーン王女を狙っていた連中が。戴冠式に出席するのにやってきたメイ国の一行に反対勢力が紛れ込んでいた」

「メイか。ロムドとザカラスに挟まれて、両国が仲よくするのを一番目障りに思っている国だな。まあ、筋というもので、逮捕できたんだな？」

「ああ。だが」

ルマニがことばをにこしたので、トウガリンはたちまち顔つきを変えました。道化の化粧は楽しく笑っている表情ですが、にらむような目でルマニに迫ります。

「だが、なんだ！？ 気がかりでもあるのか！？」

「メイから来た家来が一人足りない。つまらない雑用係の下男なんだが、城中心どこを探しても見当たらない。……俺たち間者集団全員で探しても、見つけれないんだ」

そのことばに含まれる恐ろしい危険に、トウガリンは思わず息が止まりそうになりました。その行方不明の下男こそ、メーレーン王女の命を狙う刺客かもしれないのです。

「王女はどこだ？」

とルマニに聞かれて、トウガリンは扉を振り向きました。

「たった今まで、広間で俺の芸を見ておられた。まだ広間にいるはずだ」

けれども、トウガリンがルマニと広間に駆けつけてみると、そこに王女の姿はありませんでした。ルマニは人前に顔を出すわけにはいかないので、トウガリンがメノア王妃に尋ねました。

「これはこれは。つい先ほどまでここにおられたメーレーン様が、今は忽然と姿を消していらつしやる。メーレーン様はどちらへ？ 魔法使いに弟子入りして、姿を消す術でも習得なされたのでしょうか？」

王女の姿が見えないことを心配していると悟られてはならないので、そんな言い方でおどけて見せます。貴族や貴婦人たちが面白がつて笑つ中、メノア王妃がほほえみながら答えました。

「たった今、トーマ王子がここにいらしたのです。メーレーンは王子と散歩に行きましたわ」

トーマ王子とメーレーン王女はまた城の中庭にいました。

園丁が綺麗にならした雪道を、白い息を吐きながら並んで歩いてい

きます。その足下に白黒ぶちの子犬がまとわりついていきます。

「こら、ダメよ、ルーピー」

はしゃぎすぎた子犬が王子の靴にじゃれついて歯を立てようとしたので、メーレーン王女が叱りました。ぱつと子犬が飛びのいて、しゅんと耳を伏せます。

「いいよ。大丈夫だから」

とトーマ王子は笑って言いました。言いながら、そんな自分に自分で驚いてしまいます。いつもなら、こんな無礼な真似をする犬にはすぐ腹が立ったのです。家来を呼びつけて、こんな犬は処分しろ！とどなつてるところです。それなのに、今は不思議なくらい寛大な気持ちでいられるのです。メーレーン王女がそばにいただけ。

王女がにっこり笑いかけて、ありがとう、と言いました。その素直な感謝が嬉しくて、王子もまた笑い返します。王女は王子をとても良人だと信じ込んでいます。そして、そんなふう信じられると、王子自身もなぜか本当に、自分が良い人間のような気がしてくるので。冷酷だ、無慈悲だ、亡くなった先のザカラス王に瓜二つだ、と皆から言われる自分だというのに……。

すると、メーレーン王女が言いました。

「トーマ王子は本当にお優しいですわ。なんだから、金の石の勇者様と一緒にいるみたいです」

王子は顔つきを変えました。金の石の勇者？ と聞き返します。

王女は嬉しそうにうなずきました。

「ええ。世界を救う大きな使命を持っていて、誰のことでも助けてくださいます。それはそれは勇敢でお強くて、そして、とても優しく笑ってくださいるんです。ちょうど」

ちょうどトーマ王子のように、と王女は続けようとしました。

ところが、王子は突然ぎゅつと顔を歪めました。怒った目と口調になつてどなります。

「金の石の勇者がなんだと言うんだ！ あんなのは、ただのごろつきじゃないか！！」

ごろつき？ とメーレーン王女は目を丸くしました。初めて聞くことばだったので、意味がわからなかったのです。それよりも、トーマ王子の突然の剣幕の方に驚いてしまっていました。

王子はどなり続けました。

「金の石の勇者は貧乏な下民だと聞いているぞ！ このザカラス城を破壊したのだから、奴の仕業だったというじゃないか！ そんな奴がどうして素晴らしいと言うんだ！？ そんな奴は牢屋に入れてしまえばいいんだ！」

王女はますます目を見張りました。両手で口をおおってしまいます。その大きな灰色の瞳が、みるみるうちに涙でいっぱいになっていきました。

「ど……どうして、そんなひどいことをおっしゃいますの……？ 勇者様は、本当に素晴らしい方でいらつしゃいますのよ。勇者様は闇の竜からこのお城を救ってくださいました。メーレーンのことだつて、命がけで助けに来てくださったのに……」

「じゃあ、この次もその勇者に助けてもらえばいいだろう！」

トーマ王子は完全に頭にきていました。乱暴に言い捨てると、そのまま雪の中庭に王女を置き去りにして、すたすたと歩き出します。なぜだか本当に腹が立ってしかたがありません。まだ見たこともない金の石の勇者に嫉妬する気持ちです。

後ろで王女が泣き出した気配がしていましたが、王子は振り向きませんでした。

トウガリが王女を捜してトーマ王子の部屋に来たのは、それから三十分ほど後のことでした。王女と一緒にではありませんでしたか、と言うトウガリに、と王子はぶっきらぼうに答えました。

「メーレーン姫とは中庭で別れた。その後は知らないよ。戻ったんだろ？」

「いえ、それが城中探してもどこにもいらっしやらないのです。もちろん、中庭もくまなく探したのですが……」

言いながら、道化が探るような目を向けてきたので、王子はかっと思しました。

「知らないと言っているだろう！　どこかの木の上にも登っているんじゃないのか！？」

失礼いたしました、とトウガリはお辞儀をして王子の部屋を退出しました。どうやら王女と喧嘩をしたらしい、と察しましたが、本当にメーレーン王女の行方はわかりません。中庭にも見当たらないのです。トウガリはあせりました。王女はどこへ行ってしまったのだろう、と考えます……。

一方、トーマ王子は怒り続けながらも、なんとなく気になって、部屋の窓から外を見下ろしました。窓から中庭は見えませんが、城の前庭が見えるだけです。そこを大勢の家来たちが右往左往していました。メーレーン王女を捜しているのです。庭のあちこちには雪をかけた後の雪の山がありますが、それもすべて掘り返しています。窓の外からは轟音が響いています。城の回りの水路から水を抜いている音です。本当に行方不明になっているんだ　と王子は青ざめました。これほど大がかりな捜索をしているということは、王女がどこにも見つからないということです。そんな馬鹿な、と王子は考えました。メーレーン王女とは、ついさっき中庭で別れたばかりです。こんな短時間に、どこへ消えてしまえるのでしょうか。水路の水を抜く音に、まさ

か　という想いが胸をよぎっていきます。

けれども、次の瞬間、トーマ王子は、とある場所を思い出しました。まず人目にはつかないところです。ひょっとしたらあそこかもしれない、と考えます。

窓から空に目を向けると、灰色の雲がものすごい速さで空を走っていました。風が出てきているのです。城のある山の麓からは白い煙のような霧が吹き上げてきます。間もなく雪が降り出しそうでした。行ってみよう、と王子は考え、部屋を飛び出していきました。

それは、中庭のさらに奥まった場所にある古びた壁でした。昔寺院があつた場所ですが、今はすっかり崩れて、石積みの壁が残っているだけです。そこは城の中でも特に荒れ果てた一角で、近寄るものは誰もいません。雪が地面や藪の上に降り積もっています。

けれども、人々はそこにも王女を探しに来たようでした。たくさん足跡が雪の上に残っています。壁の後ろや物陰をのぞいても王女の姿がなかったため、また別の場所へ移動していったのです。

その壁の前に、白黒ぶちの子犬がうずくまっています。ルーピーです。トーマ王子がやってくる、と、跳ね起きてワンワンと激しくほえたて、王子の服の裾をくわえて壁の前へ引っ張っていきます。

「やつぱりそうか」

とトーマ王子は言いました。人々の目にはただの壊れた壁としか映りませんが、王子には、そこにはつきりと扉が見えていたのです。ザカラス城の隠し通路の入り口のひとつですが、ザカラス王家の血を引く人間にしか見えない魔法がかけてあります。メーレーン王女はザカラス王家の血縁です。この扉を見つけて、通路の中に入ってしまったのに違いありませんでした。

トーマ王子は扉に手をかけました。ひどく古びていますが、それでも、王子が触れただけで、ひとりでに開きます。魔法はまだ生き続け

ているのです。入り口をくぐろうとすると、クーン、と後ろでルーピーが鳴きました。悲しそうな目でトーマ王子を見上げています。

「入れないのか？」

と王子は思わず言いました。犬相手に人間のようには話している自分が、なんだか滑稽な気もしますが、ルーピーの気持ちは手に取るようにわかりました。ちょっとためらってから、王子は子犬に手を差し伸べました。

「来い。ぼくと一緒なら入れるはずだ」

ワンワンワン、とたちまち子犬が駆け寄ってきました。勢いよく王子に飛びついてきます。トーマ王子はルーピーを腕に抱くと、扉をくぐって通路に入っていました。

中にはいると、そこにもまた、灰色の雲が走る空が広がっていました。左右に崩れかけた石の壁があつて、目の前に延々と続いています。足下も、今にも崩れそうな石の床です。

そこは、今はもう使われなくなった秘密の通路でした。寺院の壁の入り口から通路を抜けて、城の外に脱出できるようになっていたのですが、寺院が別の場所に建て直されてからは、この通路も廃棄されて、ただ荒れ果てていったのです。空が見えているのは、石の天井がすっかり崩れ落ちていたからでした。通路全体が瓦礫の山のようになっています。

通路に入ったとたん、子犬のルーピーが王子の腕から飛び下りしました。ワンワンほえながら走り出します。あ、おい、とあわてて王子が追いかけると、間もなく行く手から声が聞こえてきました。

「ルーピー、ルーピーですか？」

メーレン王女の声でした。王子は驚いて、犬と一緒に声のところへ駆けつけました。

通路の真ん中に大きな穴が開いていました。すっかり老朽化した石

の床が、絶えきれなくなつて陥没したのです。実はこの一帯には秘密の通路が迷路のように張り巡らされています。ところどころで立体的に交差しているので、下に通路がある場所で床が落ち込んでしまったのです。

穴の縁には真新しい崩れた痕がありました。そして、穴の中から声が聞こえ続けています。

「ルーピー！ 大丈夫！？ 無事ですか！？」

トーマ王子は慎重に縁から穴の中をのぞき込みました。ピンク色のドレスとコートを着たメーレン王女が穴の底にいました。王子を見てびっくりした顔になり、次の瞬間、ぱあっと笑顔を輝かせます。

「トーマ王子！ やっぱり来てくださつたのですね！？」

その本心に嬉しそうな表情に、王子は思わず顔を赤らめました。自分分は期待されていたんだ、信じられていたんだ、という想いに、なんだか胸がどきどきしてしまいます。そんなとまどいを隠して、王子は王女に呼びかけました。

「大丈夫かい！？ 怪我は！？」

「ありませんわ。ルーピーを探しているうちに、ここに落ちてしまいましたの。上がれなくて困つておりました」

穴は深さが二メートル以上もありました。まともに落ち込めば怪我をしたところですが、降り積もった雪がクッション代わりになつて、無事でしたのでした。

「待つて！ 今、引き上げてあげるから！」

と言いながらトーマ王子は周囲を見回しました。王子はロープも縄はしごも持っていません。どうしたら穴の中から王女を助け出せるだろう、と考えます。

すると、その膝の下で、急にずずず、と不気味な音が聞こえ始めました。ルーピーが飛び上がり、うなりながら王子の服をくわえて後ずさりします。その場から引き戻そうとしたのです。

とたんに、王子の下で床が崩れました。あつと思つた時には、王子は子犬もろとも穴の中へと墜落してしまいました。

6

ザカラス城のバルコニーで、メノア王妃は兄のアイル王と共に外を見ていました。どちらの顔も不安と心配で青ざめています。メーレーン王女はどこにも見つからないのです。兵士たちまで動員して探しているのに、城の中にも外にも、どこにも見つかりません。水に落ちた可能性を考えて、城の周囲の水路の水が抜かれていきます。とどろく水音が、見守るものたちの不安を否応なしにかきたてます。

トウガリが王妃の元へ戻ってきました。派手で楽しい化粧をした道化の顔ですが、その下で厳しい真剣な表情をしているのがわかります。メノア王妃はそれに飛びつくようにして尋ねました。

「トウガリ！ メーレーンはまだ見つからないのですか！？」

トウガリはただ首を振りました。何か言つて主人を安心させなくては、と思つのですが、トウガリ自身がどうしようもなくあせつて、ことばが出てきません。王女は本当にどこにもいないのです。まるで魔法で姿を消されてしまったようでした。

すると、そこへザカラス城の家臣が駆けつけてきました。王妃ではなく、アイル王の方へ報告します。

「陛下、先ほどからトーマ王子のお姿が見当たりません。お探ししているのですが、どこにもいらっしやらないのです」

「お、王子も？」

とアイル王は驚きました。大勢が探し回っている城の前庭へまた目

を向けます。

「ひよ、ひよつとして、お、王子がメーレーン王女を連れ出しているのか？」

トウガリはまた首を振りました。

「それは違つと存じます。トーマ殿下は先ほどご自分の部屋にいらっしやいました。おそらく殿下も王女を捜しに行かれたのでしよう」

とはいえ、とトウガリは考え込みました。王女のみならず、王子までが探しても見つからないというのは妙なことでした。これだけの人間が城内を動き回っているのです。どこにいたとしても、王子を見かけた者がありそうなものです。

すると、バルコニーに面した窓の端に、ちらりと人影が映りました。すぐにまた見えなくなりました。トウガリはそれに気がつくと、ちよつと失礼いたします、と主人たちに断つて、人影が見えた方へ急ぎました。

物陰の人目につかない場所で、ザカラスの間者のルマニが待つていました。トウガリが近づくと、低い声で言います。

「メイの下男が捕まつたぞ。やはり刺客だつたようだ」

「メーレーン様は！？」

とトウガリは思わず声を上げました。ルマニは苦い顔をしています。「わからん。問い詰めようとしたら、隠し持っていた毒で自害されてしまつた……。王女はまだ死んでいないが、おまえらには永久に見つけれん、というのが、最後のことばだ」

トウガリは唇を震わせました。しばらく立ちつくして考え込むと、きびすを返して、またメノア王妃とアイル王のいるバルコニーへ戻り、王に一礼してから言いました。

「この城の中には、誰にも知られていないような場所はございませんか？ 入り込んだら出られなくなつてしまつような……」

我ながら馬鹿なことを聞いている、とトウガリは苦々しく考えました。誰も知らない場所を王が知っているはずはないのです。王と王妃がとまどったように顔を見合わせます。

ところが、やがて、二人はそれぞれに表情を変えました。アイル王が何かに思い当たった顔になり、メノア王妃も目を見張って頬に両手を当てます。そして、二人はうなずき合いました。

「お、おまえも思い出したのか、メノア」

「ええ、兄上……あそこかもしれませんわ」

トウガリは驚きました。それはどこです！？と思わず尋ねてしまいます。

「わ、我々以外には、ぜ、絶対に見つけられない場所だ。つ、ついてきなさい」

アイル王はそう言つと、王のマントをひるがえし、先に立つて歩き出しました。

「こ、この城には、大昔から、ひ、秘密の通路がいたるところに作られてきた」

とアイル王が話していました。歩いているのは、本当に、そういう秘密の通路のひとつです。王の部屋の暖炉の陰に入り口が隠されていて、長い階段と通路で城内のいろいろな場所とつながっています。

その後についていくのは、メノア王妃とトウガリでした。王妃もザカラスの王族です。秘密の通路のことはよく知っていたし、実際に通ったこともありました。落ち着いた足取りで兄の後を歩いていきます。

「つ、通路は、お、王族以外の者は知らない場所だが、は、入って出られなくなるということはない。か、必ず出口につながっている。だ、だが、城の奥の庭には、い、今はもう使われていない、古い秘密の通路が残されているのだ。お、王家の血を引く者でなければ、見つけることも入ることもできない場所だ」

「私は子どもの頃、そこに入り込んで出られなくなってしまったことがあるのですわ」

とメノア王妃が兄の話を引き継ぎました。

「初夏の季節でした。古い寺院の壁に蔓バラが這っていて、それは綺麗に咲いていました。私はそれを眺めていて、壁に古い扉があることに気づいたので。好奇心で触れてみたら、扉はすぐに開きました。中には荒れ果てた通路が広がっていました。なんだか秘密の場所に入り込んでしまった気がして、どきどきしながら進んでいたら、私は本当に小さかったのですわ。たしか、六つか七つの歳だったと思います。足下で床が崩れて、下に落ちてしまったのですわ。呼んでも叫んでも、誰も助けに来てくれませんでした。本当に、誰も知らない場所だったのです。もうこのままここで死んでしまうのではないかと、それは不安になって泣いていました」

とアイル王がまた続けました。

「し、城の中で知っていたのは、た、たった一人。我々の祖父の代から仕えていた、い、引退した門番だけだった。もう半分ばけていて、お、おとぎ話のように、ひとりごとで言い続けていたのだ。し、城の奥の庭の寺院跡には、ひ、秘密の入り口がある、とな。わ、私はちょうど、今のトーマくらいの歳だった。ち、父上から城の秘密の通路のことを教えられたばかりで、き、きつと、それも秘密の通路だろうと考えて、こつそり探しに行つて場所を確かめていたのだ。つ、蔓バラや植物に隠されていて、たとえ王族であっても、通りかかってもまず気がつかないような入り口だった」

「だから、私がおの場所に入り込んで出られなくなっても、誰も私の居場所はわからずにいたのです。兄上が助けてくださらなかつたら、永遠にあそこから出られませんでしたわ。あのままあそこで死ん

でしまっていたことでしょう」

「ま、魔法の通路だったからな……。ま、魔法使いにも占い師にも見つけられない術がかけられていて、そ、それがまだ生きていたのだ。本当に、だ、誰にも見つけられない場所だったのだ」

「でも、兄上は来てくださった」

メノア王妃はそう言って、にっこりと兄に笑いかけました。

「とても頼もしゅうございましたわ。穴の中の私をのぞき込んでくださった兄上の顔が、まるで天のお使いのように見えました。それに、兄上は、私が父上たちから叱られないように、こっそり助け出して城に連れ戻してくださいました。この秘密の通路を通して。それも本当に嬉しゅうございましたわ」

代わるがわる思い出話をする兄妹を、トウガリは半ば驚き、感心しながら眺めていました。なるほど、きょうだいというのはこういうものか、とも考えます。いつもは本当に頼りなく見えるアイル王なのに、ランプに照らされたその顔は、不思議なくらい兄らしく、頼もしく見えていたのです。

そのアイル王が笑いました。

「わ、私自身が、メノアを探しに出たなどと言ったら、ち、父上から叱られるところだったからな。て、哲学の講義をすっぱかしていたのだ。ち、父上にはとうとう、最後までお教えしなかった」

兄と妹は顔を見合わせ、くすくすと笑い合いました。親に共通の秘密を持った子ども同士の笑いです。おやおや、とトウガリはまた思いました。なんだか本当に幼いきょうだいを目の前にしているような気がしてきます。

けれども、アイル王はまたすぐに真剣な表情に戻りました。行く手に目を向け直して言います。

「あ、あの通路は本当に古びている。す、すぐに床が崩れて危険なの

だ。メ、メーレーン姫が怪我などしていなければよいのだが……」

「トーマ王子もそこにいらつしやるのでしょうか？」

とトウガリは尋ねました。

「そ、そうかもしれない……。わ、私はあの場所を教えたことがあるのだ。ず、ずいぶん前のことだが、そ、それを覚えていたのかもしれない」

考え込みながらアイル王が言い、一同はそれ以上は無駄話をせずに、隠し通路を先へと急ぎました。

7

灰色の空から雪が降り出しました。

白い大きな雪のひらが雲から湧き出して、地上に向かって落ちてきます。見上げると、まるで無数の鳥か虫が空一面に浮いているようです。すぐ近くまで落ちてきて、ようやくそれが雪だとわかります。

崩れた通路の穴の底に座り込んで、トーマ王子は空を見上げ続けていました。まずいな、と考えます。メーレーン王女を助けに来て、一緒に穴に落ちてしまった王子です。幸い怪我はありませんでしたが、這い上がることができなくて、王女と一緒に座り込んでいるしかありませんでした。雪は穴の中にも後から後から降ってきます。たちまち肩や膝や頭の上が白くなつていきます。

メーレーン王女が、ぶるつと大きく身震いしました。王女はドレスの上にコートを着ていましたが、寒さが布地をしみ通ってきたのです。トーマ王子は横目でそれを見ました。王子自身はあわてて部屋を出てきたので、マントさえはあっていません。雪は王子の体も冷やして

いきます。

けれども、王女のプラチナブロンズが小刻みに震え続けているのを見て、王子は立ち上がりました。自分が着ていた丈の長い上着を脱いで、王女のコートの上から着せかけます。メーレーン王女はびっくりしました。

「いけませんわ、トーマ王子！ 風邪をひいてしまいます！」

「大丈夫だよ。ぼくは寒さには強いんだ」

歯が鳴りそうになるのを必死でこらえながら、王子は笑って見せました。冷たい外気は薄いシャツを通して肌に突き刺さってくるようです。それでも王女を安心させようと、わざと話題を変えます。

「そう言えば、メーレーン姫はどうしてこんなところに入り込んだの？」

さつき、ルーピーを探しに来たって言ってたよね。でも、ルーピーは通路の入り口で君を待っていたんだよ」

王女は首をかしげました。

「お城の下男から教えられたのですわ。王女様の犬が奥の壁の入り口から中に入って出られなくなっています、って。ルーピーが見当たらなかったの、メーレーンはてっきり本当にここにいるのだと思っただけですわ。ルーピーが無事で良かったですけれど」

そう言っ子犬をしつかり抱き直した王女を、王子は黙って見つめました。どうやら誰かにはめられたらしいな、と考えます。きっと、その人物はこの危険な通路のことを知っていたのでしょうか。邪魔者の王女をそこに閉じこめれば、自然と穴に落ちて脱出できなくなるかとわかっていたのです。ロムドの王女を目障りに思う人間は、この世に大勢いるに違いありません。

けれども、王子はそれを口にはしませんでした。そんなことを話して聞かせれば、寒さに震える少女をいっそう不安がらせるだけです。雪はますます強くなってきます。早くここから脱出しなければ、遅かれ早かれ二人とも凍死してしまいます。どうしよう、どうしたらいい

んだろう、と王子は考え続けました。良い考えは何も浮かびません。

すると、今度は王女の方が話しかけてきました。

「メーレーンは、穴に落ちてたった一人で、このまま死んでしまうのではないかと思っていました。怖くて怖くて、泣きそうになっていたから、トーマ王子が助けに来てくださいました。メーレーンは本当に嬉しかったですわ」

降りつめる雪の中、寒さに震えているのに、少女はにっこりと笑いかけてきました。暖かい信頼のまなざしです。王子は思わず真っ赤になると、目をそらして口を歪めました。

「でも、ぼくまでこうして出られなくなってる。君を助けてあげられないんだよ。非力で情けない奴さ」

「いいえ、いいえ」

メーレーンは一生懸命頭を振りました。

「トーマ王子はメーレーンがいる場所をご存じでした。まるで占者のようですわ。どうしておわかりになったのでしょうか。素晴らしいと思いますわ」

「昔、父上から言われたことがあったんだ。寺院跡には秘密の通路の入り口があつて、入ったら誰にも見つけてもらえなくなるから気をつける、って」

ふつと、王子は口をつぐみました。父にそう教えられたのは、もう何年も前のことです。いつもおどおどして、祖父の先王を恐れてばかりいた父でした。父親らしいことなど何もしてくれなかったのに、その時には、なんのほずみか、そんなふう息子を心配してくれたのです。とても珍しいことでした。だから、王子は今でも覚えていたのです。珍しくて、とても嬉しいことだったから。

「入ったら誰にも見つけてもらえなくなる？」

とメーレーン王女が目を見張っていました。みるみるうちに、その顔が不安に曇っていきます。

「誰にもここはわからないのですか？ 誰も探しには来てくださらないの？ メーレーンたちは助からないのですか？」

大きな瞳が泣き出しそうにうるみ始めたのを見て、王子は、しまった、と思いました。あわてて言います。

「父上がいるよ！ 父上だけは、この場所をご存じだ。きっと、ぼくらがここにいと気がついて、探しに来てくれるよ。」

本当に？ と少年は胸の内つぶやきました。神経質で、すぐに逃げ腰になる父親です。息子の自分のことさえ、死んだ祖父に対するように恐れています。祖父に似ている自分を嫌っているのだと、トーマ王子は気がついていました。そんな父が、本当に自分たちを探しに来てくれるでしょうか？ メーレーン王女はともかく、自分のことは、行方不明になったのを幸いと探さずについて、そのままつかい払いしてしまうかもしれません……。

少年は、ぎゅつと唇をかみました。

雪は降り続けます。少年の肩にも、少女の背中にも、どんどん降り積もっていきます。コートと上着をはおっているのに、少女がまた大きく震えました。寒さはますます厳しくなっています。少女の華奢な体はすっかり冷え切っていたのです。腕の中の子犬にぬくもりを求めて、いっそう体を丸くします。

トーマ王子はメーレーン王女の体を抱きました。まだ少年の王子です。体もそんなに大きくはありません。それでも王女を雪や寒さから守ろうと、必死で抱きしめ続けます。腕の中で少女は震え続けていました。歯の根が合わなくて、もう何も言うことができないよつです。

王子は押し寄せるように雪が降ってくる空を見上げました。雪と寒

さに王子の体もすっかり凍えていて、どんなに叫びたくても、もう声が出せません。

王子は心の中で叫びました。

父上！ お願いだ、父上！ 助けに来て！ このままじゃメー

レーン姫が死んでしまうよ！

やっぱり声にはなりません。

すると、突然王女の腕の中で子犬が頭を上げました。暴れながら外に抜け出し、空に向かってほえ始めます。

ワンワンワンワン……！！！！

とたんに、上の方で足音が聞こえてきました。誰かが駆け寄ってきます。瓦礫を踏み、砂をこする音が響いた後、穴の縁から顔をのぞかせたのはアイル王でした。底で抱き合ったまま動けなくなっている少年と少女を見ると、甲高い声を上げます。

「トーマ！ メーレーン姫！」

歓声でした。

ぼかん、とトーマ王子はそれを見上げていました。自分の目と耳が信じられません。父は本当に自分たちを探して来たのです。

続いて顔をのぞかせたのは道化のトウガリでした。化粧をした顔が大きく歪みます。安堵の笑顔です。少し遅れて、メノア王妃もおそろおそろ穴をのぞき込んできました。子どもたちの無事な姿に、たちまち輝く笑顔になります。お母様、とメーレーン王女がつぶやきました。凍えた咽はかすれ声しか出せなかったのです。代わりに王女は大粒の涙をこぼし始めました。ワンワンワン……と犬が元気にほえ続けます。「お待ちを、お二人とも。今すぐ引き上げて差し上げます。」

そう言っ、道化がロープと共に穴の中へ下りてきました。穴の底から助け出された二人は、それぞれの親の前に立っています。

た。メノア王妃がメーレン王女を抱きしめて嬉し泣きます。王女の方でも母にすがりついて泣きじゃくっています。トーマ王子はアイル王を見上げました。

「父上……」

それ以上は声になりませんでした。

父は相変わらず、とても神経質そうでした。おびえたような、心配そうな表情も相変わらずです。それなのに、なんだかいつもと違ったものが、父の顔の中にあるような気がしました。

すると、アイル王が目を細めました。王子にほほえみかけたのです。

「よ、よくぞメーレン姫を守った。え、偉かったぞ」

いつものようにつまずきながら、それでも、はっきりと、父は息子を誉めました。トーマ王子はびっくりして、さらに何も言えなくなりました。目を見張って父を見つめてしまします。

そんな王子が上着もない薄着姿でいるのを見て、アイル王は自分のマントを外しました。王子にふわりと着せかけます。王子はあわてました。それは王だけが着るマントで、他の誰も身につけてはならないものだったのです。

けれども、王は言いました。

「い、いいから着ていなさい　か、風邪をひいては大変だ」

トーマ王子はもう少しで泣き出しそうになりました。たった今まで王がおっていたマントからは、父のぬくもりと匂いが伝わってきた……。

すると、メノア王妃が泣き笑いの顔でトーマ王子に言いました。

「メーレンを助けてくださったって本当にありがとう、王子。穴の中でメーレンを守ってくださいっている姿は、なんだか、昔の兄上と私を見ているみたいでしたよ。本当に王子は兄上にそっくりですわ」

最後のことは、王子だけでなく、兄のアイル王にも言ったものでした。妹にほほえまれて、王はちょっと笑い返しました。

「そ、そつだな……私もそつ思ったぞ。さ、さすがは　私の息子だ」
そつ言つて、照れくささと誇らしさが入り混じった顔をするアイル王に、トウガリが言いました。

「王子は陛下によく似てらっしゃいますよ。賢くて頭の切れるところなどは、本当にそっくりであられる」

これには父と息子が揃って照れたような顔をしました。

そして、アイル王は息子を抱き寄せて言いました。

「さ、さあ、城に戻ろう。み、皆に叱られては大変だから、ひ、秘密の通路から、こっそりとな　」

意味がわからなくてきよとんとする子どもたちの前で、三人の大人たちは声を上げて笑い出しました。

8

翌日、アイル王の戴冠式が城の大広間で執り行われました。前日のメーレン王女の失踪騒ぎで段取りが大幅に狂ったのですが、家臣たちが徹夜で準備をして、どうにか式典に間に合わせる事ができました。

大勢の貴族や家臣、外国からの賓客の見守る中、司祭長がアイル王に王冠をかぶせ、権威のしるしである錫しやくを渡します。

王冠は、これまでの冠がザカラス城崩落の際に失われたので、新たにアイル王に合わせて作られたものでした。金に輝く見事な冠ですが、なにぶん時間がなかったために、先の宝冠より小さくて見劣りがするのはどうしようもないところでした。王の服を着て王のマントをはおったアイル王自身もそうでした。痩せて神経質そうな新王は、冷や

やかな威圧感でザカラスに君臨していた先王とは比べものになりません。

人々は新王の誕生を拍手で祝いましたが、心の内では誰もが先のザカラス王を思い出し、新しいザカラス王の隣に並べて、ひそかに頭を振っていたのです。これでザカラスの栄華も終わった、これからは混乱と混沌の時代がやってくるのに違いなしと。見るからに頼りなさそうなお新王に、広大なザカラスを統治できるだけの力があるとは、誰にも想像できなかったのです。

うわべだけはめでたく式典は進行し、祝いの角笛が高らかに鳴らされる中、新王は一段高い場所にある玉座へと上りました。

実際には、アイル王はもうザカラス王としての政務に就いています。

この戴冠式は王に王位を与えるためのものではなく、国の内外に正式に新王の誕生を知らせるためのものだったのです。玉座の前に立つて王が言うことばが、ザカラス王としての初めての公式の発言でした。

角笛の響きがやむと、新しいザカラス王は口を開きました。甲高い響きの声で話し始めます。

「わ、私は今日から、せ、正式なザ、ザ、ザカラスの王として、この玉座に座る。」

やっぱりそのことばは何度もつまずきます。これ以上ないと言うほど王が緊張しているのが、表情からはつきり伝わってきます。参列した人々から苦笑がもれました。明らかに失望した顔で頭を振る者さえ出てきます。王は必死で話しています。その真剣ぶりが、逆に聞く者たちを落ち着かない気持ちにします。

王は錫を手の中で何度も握ったり離したりしていました。いかにも落ちつきなく見えるのですが、公式の場でそれを注意するわけにもいなくて、大臣たちがひそかにやきもきしていました。

王は話し続けました。

「わ、わたしには、ち、父ギゾン王のような、きよ、強大な指導力は

ない。そ、それは自分でも承知している。」

あまりに素直な王のことばが、また参列者の苦笑いを招きます。亡くなったギゾン王であれば、そのような無礼者には即座に処刑を命じたところですが、この新王はそんなことはしません。笑われても、馬鹿にする目で見られても、ただ必死で話し続けます。

「こ、この国を、わ、私一人で治めていくことは不可能だ。だ、だから、皆の力を借りたいと思っています。か、家臣や国民のザカラスへの愛国心、こ、この国を隣人と思ってくれる諸外国の友情、そ、それらを信じて、これからもこの国を守り、は、繁栄に導いていきたいと思っている。」

まあ、言っていることはそこそこまともだな、と参列者たちは考えました。自分では何もできないことが明らかかな王です。人の助けを借りなくてはならないことを、聞こえのいいことばでまとめたのです。

控える大臣たちも、ほっとした顔をしていました。王は予定通りの発言をすることができました。大きな失態をさらすこともなく、式典をなんとか無事に終えることができたのです。

再び角笛が鳴らされました。王が広間を退出するのです。これで本当に戴冠式は終了でした。人々が拍手で王を見送ろうとします。

ところが、王は動きませんでした。玉座の前に立ったまま、錫を神経質にもてあそび続けています。人々はげんなり顔をしました。重臣たちが、あせって王を促します。陛下、ご退出を……。

すると、アイル王がびたりと手を止めました。錫を握り直し、顔を上げて目の前の人々を見渡します。

「わ、私はもう一つ、皆に告げたいことがある。」

家臣たちは仰天しました。予定にはなかった王の発言です。いった何を言い出すのだ、と考え、あわてて王を止めようと思いました。絶対に何かまずいことが起きると思ったのです。

ところが、王は家臣たちを無視して話し続けました。

「きよ、今日この席では、わ、我が国と親愛なる隣国ロムドが、わ、和平を取り結ぶことにもなっていた。ロ、ロムドの皇太子に急な公務が入ってしまったために、延期と言うことになっていたが、そ、それを予定通り行おうと思う」

家臣たちは本当にびつくり仰天しました。聞いていません。この戴冠式でロムドとの和平条約の調印式を行うとは、彼らは王からまったく聞かされていなかったのです。準備など、何一つしていませんでした。

陛下、急にそのようなことを言われても　と悲鳴を上げた宰相に、アイル王は顔を向けました。驚いたことに、王は笑っていました。痩せた顔、神経質そうな顔つき、それは相変わらずなのに、なぜだか余裕のある表情で言います。

「ちよ、調印のための書状はすでに準備してある。わ、私の執務室の机の上だ。そ、それを持ってまいれ」

「ですが、陛下！　和平団がいらっしゃらなければ、条約を結ぶことは――！」

と宰相は言い続けました。ロムドの和平団の代表であるオリバンは、自国にいて、この戴冠式には出席していません。すると、アイル王はまた笑いました。目を細めながら、参列者の最前列に座る者たちを眺めます。

「わ、和平団ならそこにいるではないか。ロ、ロムドの王妃と王女だ。これほど麗しく優しい和平団は、例を見ないぞ」

まあ、とメノア王妃が驚きました。メーレーン王女も目を丸くします。二人も、アイル王からこんな話はまったく聞かされていなかったのです。

「メ、メノア王妃は我が国の王女であった。ロ、ロムドとザカラスの和平を誓ってサインをする役目は、ロムドの王女に頼みたいと思うの

だが　引き受けていただけかな、メーレーン姫？」

まあ、とメーレーン王女も母そっくりに言いました。両手を頬に押し当てて、とまどったように母や、その後ろに控えるトウガリを振り向きました。

「どういたしましょう、母上、トウガリ？　メーレーンなどが、そんな大役をお引き受けしてよろしいのでしょうか？」

トウガリも王のこの突然の申し出には驚いていましたが、ここにきて、なるほど、と心でうなずいていました。王は思いつきで言っているように聞こえますが、実際には非常にうまい運びだったので。

メイをはじめとする国々は、ロムドとザカラスが和平を結ぶのを警戒し続けています。メーレーン王女たちが狙われることはもうないかもしれませんが、和平条約の時までに、また何らかの妨害を起こすことは十分に考えられました。ただ、それもこの戴冠式が終わってからのことです。その油断の隙を突いて、アイル王は今この場で和平条約を取り結ぼうとしているのです。

とまどい続けるメーレーン王女に、トウガリは穏やかに言いました。「お引き受けください、姫様。姫様は本当にこの国へ平和と和解をもたらされたのです。和平条約の調印するには、一番ふさわしいと存じますよ」

メーレーン王女は曖昧に首をかしげました。自分がザカラスに平和と和解をもたらした、と言われても、いつどうやってそんなことをしたのか、さっぱり思い当たらなかったのです。

すると、メノア王妃がにっこりほほえみました。優しく娘に話しかけます。

「兄上のおっしゃる通りになさい、メーレーン。兄上があなたを適任だとおっしゃっているのですから、間違いはないでしょう。兄上のお考えは、いつだって深淵で正しいのですからね」

母からもそう言われて、メーレーン王女はうなずきました。席から

立ち上がり、玉座のアイル王に向かって優雅にお辞儀をして見せます。「承知いたしました、陛下。メーレーンは、喜んでお引き受けさせていただきますわ」

アイル王は笑顔でうなずきました。今度は自分のすぐ下の席に座っている息子へ声をかけます。

「わ、我が国の代表は、そ、そなただ、トーマ王子。両国の平和と協力は、これから未永く続かなくてはならない。み、未来へ続く架け橋に、そなたとメーレーン姫とが調印をするのだ」

トーマ王子はびつくりしました。父王を見上げたまま、声を出すことができません。そんな重大な役目を父から任せられるとは想像してもしなかつたのです。

けれども、式典に参列していた人々は大いに納得していました。突如の和平調印式には驚きましたが、それがかわいらしい王子と王女によつて取り結ばれるというのは、いかにもめでたい席にふさわしいことに思えたのです。未来を担っていくのは青少年女たちです。両国の未来の平和を約束するには本当に適任と言えました。

まだ驚いて立ちすくんでいるトーマ王子に、メーレーン王女がほほえみました。バラ色の手袋をはめた手を差し伸べて呼びかけます。

「まいりましたよ、トーマ王子」

王子は真つ赤になりました。照れながら、緊張しながら、ぎくしゃくと進み出てきて、王女の手を取ります。そんな王子の様子が参列者の笑顔を誘いました。なんだ、冷酷で意地悪な王子だというもつぱらの噂だったけれど、本当は子どもらしい、かわいい王子じゃないか。

。そんな好意的なほほえみです。
少年と少女は、家臣たちが大あわてで準備したテーブルへと進み出ていきました。そこにはザカラスとロムドの未長い和平を約束する、アイル王直筆の証書が載っています。二人の前にアイル王が下りてき

て、二人がサインをする場所を自ら教え、二人がペンを動かしていく様子を見守ります。

ほほえましいその光景に、参列客はいっそう笑顔になりました。中には、その場面を苦々しく見ていた国の代表もあつたのかもしれない。けれども、それは大きな笑顔の波の中に呑み込まれてしまつていました。

メノア王妃は客席の最前列で子どもたちを見守っていました。輝くほほえみは天使の笑顔です。自分の後ろに控えている道化へ話しかけます。

「ザカラスとロムドは、これからもずっと良い隣人であることができませぬ。両国に危険が迫つたときにも、きつと協力し合うことができませぬ。……それもこれも、あなたの働きのおかげです、トウガリ」

トウガリはびつくりしました。あわててこう答えます。

「メ、メノア様、トウガリは何もしてはおりませぬ。和平をお決めになつたのはアイル陛下とロムド国王陛下ですし、調印しているのはメーレーン様とトーマ殿下です。トウガリはただの道化。ちよろちよるとメノア様方のお目の端を横切っているだけの存在で」

「トウガリはいつも、私やメーレーンを守って助けてくれます。今回もそうでした。トウガリがいなければ、メーレーンもトーマ王子も助かりませんでした。この和平も結ばれなかったことでしょう。感謝していますわ、トウガリ。ありがとう」

メノア王妃は振り向いてトウガリを見つめました。輝くほほえみをトウガリに向けます。

トウガリは思わず真つ赤になりました。厚化粧が顔色や表情を隠してくれるのが幸いでした。深々と王妃に頭を下げ、片手を胸に当てて答えます。

「これはこれは……まことに身に余るおことはでございます。トウガ

りめはもう、メノア様からごほうびをいただいておりますのに。メノア様は、あの通路の入り口をくぐれなかったこのトウガリめに、御手を差し出して、このトウガリの手を取って通路に導いてくださいました。あれほどの幸せは、トウガリの人生にはございません。その上、直々に感謝のことばまでいただけるとは、感激至極でトウガリはもう

これ以上何も言えません、と言つように、トウガリはことばを切りました。もしかしたらトウガリは本当に、感激のあまり声が出なくなつてしまったのかもしれない。

メノア王妃のかたわらで、片膝をつき、胸に手を当てて頭を下げる道化の姿は、なぜだか高貴な騎士のようにも見えました。メノア王妃が美しく優しい笑顔でそれを見つめ続けています。

和平条約の書状にサインを終えて、メーレーン王女とトーマ王子が顔を見合わせました。誇らしさで頬を染めながら、うふふつと笑い合います。

王女が王子に話しかけました。

「今度はトーマ王子がロムドにおいでくださいませね。お城をご案内しますわ。オリバンお兄様にもお引き合わせします。ぜひ来てくださいなね」

「うん、きっと……。その時にはルーピーも一緒に連れていくからね」とトーマ王子は答えて、いつそう顔を赤くしました。嬉しそうに笑うメーレーン王女を見て、つられてまた一緒に笑い出します。

そんな子どもたちから目を上げて、アイル王は参列する人々に言いました。

「ザ、ザカラスとロムドの両国は、穏やかなるときも困難に襲われたときにも、永久に助け合える友人となることを誓う。そ、そして我らは世界の平和と秩序を守つていこう……。こ、この場に居合わせる方

々が、その証人だ。あ、新しいザカラスとロムドの友情を、未長く見守つてくださるように」

相変わらず、つまずきながらの王のことばです。先王のような威厳も、相手を従わせるような迫力もありません。けれども、アイル王のことばは、聞く人々の胸に染み入りました。自然に拍手がわき起こります。

次第に大きくなっていく拍手を聞きながら、トーマ王子は目を輝かせて父王を見上げました。メーレーン王女もまた笑顔になります。アイル王はうなずくと、黙って子どもたちを引き寄せました。三人で人々の拍手の中に立ちます。

拍手はますます高まり、やがて、割れんばかりの大拍手になりました。歓声が広間を揺るがします。ザカラス万歳！ ロムド万歳！ ザカラス新王万歳！ とその歓声は言っていました。

(2008年4月19日)